

さびしかったらお念仏なさいませよ

ご講座 (『尊号真像銘文』註釈版聖典 P655) 」

南無阿弥陀仏をとなふるは、仏をほめたてまつるになるとなり

一、あの子はたあれ

桜の季節になりました。それも大分散ってしまいました。

はじめに、「あの子はたあれ」の歌を皆さんで歌ってみましょう。

歌詞の中で女の子のお名前と男の子のお名前をみなさんのお名前に替えて歌ってみましょうね。お婆ちゃんのお名前はなんとおっしゃいますか「 はま」です。おはまさんですか、それでは、一番の『みよちゃん』のかわりに『はまちゃん』と歌いましょう。もう御一人、お隣のお婆ちゃんのお名前はなんとおっしゃいますか「 きく」です。おきくさんですか…

そのお隣のお爺ちゃんのお名前は何とおっしゃいますか。「 しょうご」です。「しょうごさんですか、それでは、はまちゃん、きくちゃんて一番を二度繰り返し、しょうちゃんて二番を歌ってみましょうね。

「あの子はたあれたれでしょね なんなんなつめのはなのした

おにんぎょさんとあそんでる となりのはまちゃんじゃないでしょか」

元気な歌声が部屋一杯に響きます。お婆ちゃん、お爺さん方の表情が輝きます。歌い終わってお尋ねします。「さて、いま、みなさんは幾つくらいのお歳に還られたでしょうか。五つ、六つ、七つ、八つ？

その頃だったですね。うなづくお婆ちゃんがいらっっしゃいます。

さて、その頃は、皆さんのお父さん、お母さんがいらっっしゃいましたね。お父さん、お母さんには、お父さん、お母さんがいらっっしゃいましたから皆さんには、お爺ちゃん、お婆ちゃんが二人づついらっっしゃいましたね。初めて皆さんに仏さまのご縁を結んで下さったのはどなたでしたか。

お婆ちゃんに手を引かれてお寺参りをしたのではなかったでしょうか。多くの皆さんがうなづかれます。

皆さんは、その頃、皆さんのお爺ちゃん、お婆ちゃんがお念仏なさっていらしたのを耳にしていらっしまったのではなかったでしょうか。お爺ちゃん、お婆ちゃんがお念仏なさり「ありがたいこっちゃんのう」と仏さまのお慈悲を慶ばれたお声を耳にして、皆様方もまた、すっかり安心した気持ちになられたのではなかったでしょうか。なつかしい思い出です。

その懐かしいお爺ちゃん、お婆ちゃんは今はいらっっしゃいませんね。どこに行かれたのでしょうか。お浄土です、阿弥陀様のお国です。阿弥陀如来様のお浄土に還ってゆかれたのです。あれから何年たったことでしょうか。

今皆様方も、長い間の人生のご苦勞を重ねて、お歳を召しました。

あの頃、皆様方は、お念仏を称えつつ「ありがたいこっちゃんのう」と阿弥陀様のお慈悲をお慶びになったお爺ちゃんお婆ちゃんのお声を聞いてすっかり安心することができたのでした。それは、お爺ちゃん、お婆ちゃんが阿弥陀如来様のお徳を尊んでいらっしまったからです。そのお爺ちゃん、お婆ちゃんの声が聞こえなくなった今の私たちは、どうしたら、あのときの安心した心持に帰ってゆくことができるでしょうか。

二、南無阿弥陀仏と称えれば、阿弥陀様にお遇いできるのです。

私たちのご開山聖人「親鸞様」は次のようにおっしゃっておいでです。

「南無阿弥陀仏をとなふるは、仏をほめたてまつるになるとなり(『尊号真像銘文』註釈版聖典 P655)」と。なんとありがたいことでしょうか。

ご開山聖人のこのご文のお導きによって、この私にも阿弥陀如来様のお徳を尊ばせて戴くことができるのでした。

それでは、折角ですから、みなさんとご一緒に両手を合わせて、両三度お念仏をお称え申してみましよう。

「なんまんだ一ぶ、なんまんだ一ぶ、なんまんだ一ぶ…」

さて、今、みなさんとご一緒にお念仏をお称え申したことでした。

それでは、みなさんにお尋ねしてみましょ。今、皆さんとご一緒に『なむあみだぶつ』とお称えしました。すると聞こえて下さったものがあります。では、なんと聞こえて下さったでしょう。いかがでしょうか。

実は、私はいつもご法事でこの質問をすることにしております。先般もあるお婆ちゃんがお亡くなりになったご法事でお尋ねしました。すると「お母さんの声が聞こえました」とお応えになりました。お婆ちゃんの御子さんで今は立派なお歳のご主人のお応えでした。質問の意味を先回りしてお応えになっていたのです。それはそれで大変結構なことでありま。有難いことです。けれども、私はもっと単純にお尋ねしたのです。

「南無阿弥陀仏」とお称えしたら、「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さったのです。これならどなた様も納得されることでしょう。

ただ、その声は、私の声でありながら、私の声ではありません。

阿弥陀如来様が私を喚(よ)んでおって下さるお喚び声だったのです。

阿弥陀如来様のお喚び声が聞こえた以上、確かに確かに、阿弥陀如来様がいまここにいらっしゃる何よりもの証拠ではないでしょうか。

親鸞聖人が現われて下さる前は、今命が終わるそのときに、阿弥陀様が観音様と勢至様を携えて目の前に現われて下さるかどうかが私がお浄土に生まれることのできるかどうかの分かれ目だったのです。

それはとても難しいことでした。けれども、夢の中ならば、心がきれいに澄み切った朝方にほのかに夢に見えて下さることがあったというのです。お手許の歌詞の梁塵秘抄(りょうじんひしょう)の一番はそのお心を歌い上げたものです。でもこれは親鸞聖人のお心ではありません。そこでその御心を二番、三番に歌い上げてみました。

私を助けて下さる阿弥陀如来がいらっしゃることに私自身気付かないでいることは哀れなことです。まるで夢の中でまどろんでいるその私を呼び覚まそうとして阿弥陀様は声になって呼び掛けていて下さるのです。三番は、それが証拠に「南無阿弥陀仏」と称えると、すぐさま聞こえて下さる「南無阿弥陀仏」のみ名を通して、阿弥陀如来様に遇わせて戴くことを歌い上げたものであります。それでは、「仏は常にいませども」を一番から三番までご一緒に歌ってみることにしましょう。

一、ほとけはつねに いませども うつつならぬぞ あはれなる  
ひとのおとせぬ あかつきに ほのかにゆめに みえたまふ  
二、ほとけはつねに いませども きづかぬわれぞ あはれなる  
まどろむわれを よびさまし こえになりてぞ よびたまふ  
三、ほとけはつねに ましまして こえになりてぞ よびたまふ  
なむあみだぶと となふれば きこゆるみなに みえたまふ

はい、ありがとうございます。みなさん、これからは、もしも淋しかったら、「南無阿弥陀仏」とお念仏なさいませよ。

すると「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さいます。それは阿弥陀様直々のお喚(よ)び声だったのです。お喚び声が聞こえて下さるのは、阿弥陀様が今ここにいらっしゃる何よりもの証拠だったのです。

聞こえて下さったお六字(お名号)が私を懐かしいお爺ちゃんお婆ちゃん達のいらっしゃるお浄土につれて行って下さるのです。合掌(玄宥記)。

子供の集い(キッズサンガ・降誕会)五月十七日十三時半より  
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より  
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より  
著作編集兼発行元 リびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)  
〒五二〇 〇五〇一 滋賀県大津市北小松四五二番地 ☎〇七七 五九六 〇一九六  
FAX 〇七七 五九六 〇一九七 ☎-ℓ・mhkatata@mx.scn.tv 使務 堅田玄宥  
HのOP入おミの入Lのそ一Vマ一カ <http://www.isoreed.net>